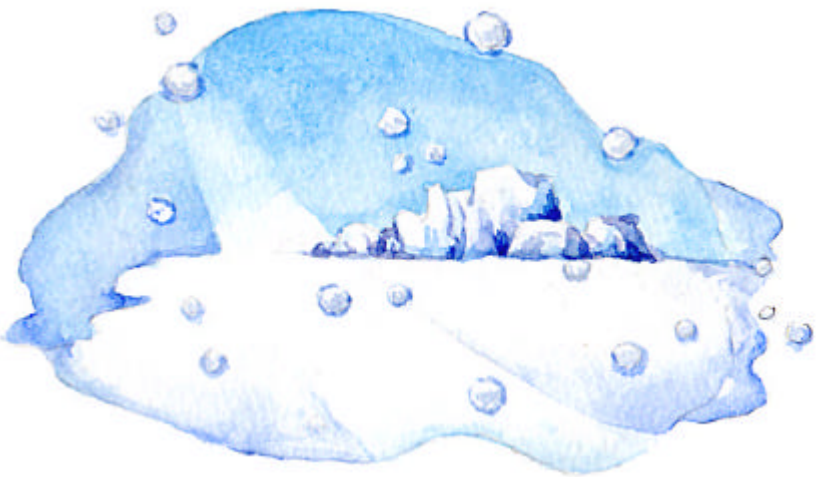


## 白夜の夢

挿絵

罌（ルイ）



私は北極圏に近いツンドラ地帯  
の家にいた。  
白夜の夕方だった。  
薄明かりにつつまれた庭先に  
ぼんやりと影が現れた。  
ペンギンの母と子どもだった。  
温暖化の海流異変で  
北極海周辺にもペンギンが棲み  
始めていた。  
母親が言った。

「軒下でも結構です。今夜、泊まらせて頂きたいのですが」  
私は言った。  
「夜は冷えるよ。家に入りなさい」  
母親が言った。  
「いいえ。あなた方人間の住まいは私どもには暖かすぎるのです。温まると、この子がさなぎを抜け出してしまいます。脱皮するにはまだ早いのです」



そう言うと、軒下の以前飼っていたエスキモー犬の小屋に子どもを連れて行った。子どもはよちよちと危なげだった。  
その夜は強い風が吹き続けた。  
私は深夜に目覚め、ペンギンの親子

のことを考え、まんじりともせず朝を迎えた。

明け方の空には、淡い白色のオーロラが浮かんでいた。

その明かりの中で母親は、庭に出た私に気づくと話しかけてきた。

「ありがとうございます。お陰さまで夜を過ごすことができました。甘えついでで申し訳ありませんが、今夜もう一晩泊まらせて頂きたいのですが」

「かまいませんよ。ぼうやにもその方が良いでしょう」

「ありがとうございます。私はこれから医者の治療を受けにまいります。子どもはおいてまいります。そのまま小屋で休ませてやって下さい」

「治療？どこがお悪いのですか」

「最近空気が悪くなりましたして、ひどい喘息を起こすのでございます。あたたかい地方から流れ込んでくる空気に悪いものが混ざっているからだと医者は申しますが、何故そうなるのかは判らないのだそうです。」

お医者様の指示通りにして薔薇色

に燃えるオーロラの光を胸一杯に吸い込むと治ると言われまして。けれどもそのオーロラは年一回、今夜しか現れないのです。しかも一色でも他の色が混じっておりますと、効果は現れないのだそうです。最近が悪く空気のせいだで薔薇色一色のオーロラは滅多に出なくなりまして」

そこまで話すと母親は、苦しそうに咳き込み始めた。私は背中をさすつてやった。背中の羽毛は柔らかくて暖かだった。

しばらくすると発作はしずまった。母親はまた話し始めた。

「もし私が戻らなくとも、子どもは小屋にそっと寝かしておいてくださいませ。そして家の中には、決して入れないでおいて頂きたいのです」

「何故ですか」

「食事は十分に与えてあります。脱皮が始まる前には、食事を与えたり暖かくしたりしてはいけないのです」

「どうして」

「もしそうすると、早すぎる脱皮を

して人間になってしまいうからで  
す」

私はペンギンが脱皮したり、人間に  
変わってしまふことなど知らなかつ  
た。

「いつからそうなったのですか」

「暖かい汚れた空気が流れてくるよ  
うになってからです」

私は胸がはりさけるような思いにと  
らわれた。

でも、私は尋ねた。

「何故、脱皮するのですか」

「お医者様は、汚れた空気に耐えら  
れるように自然がそうしている  
のだろうとおっしゃってます」

私は母親の清んだ瞳を見つめて、も  
う一つ尋ねた。

「何故、人間になってはいけないの  
ですか」

母親は躊躇していたが、ついに言っ  
た。

「お世話になった人間のあなた様に  
は失礼かと存じますが、人間はいく  
さを致します。人間になると寒い白  
夜でも暖かく過ごす知恵がつくと  
言  
い  
伝  
え  
ら  
れ  
て  
お  
り  
ま  
す  
が  
、  
私  
ど  
も  
ペ  
ン  
ギ  
ン  
は  
い  
く  
ら  
知  
恵  
が  
つ  
い  
て  
も、

いくさはいやでございます。  
ですから人間にはなりたくないし  
子どもも人間に変わらせたくないの  
でございます。――  
言い終わるとペンギンの母親は丁寧  
に私に挨拶をして、雪原を歩み始め  
た。  
一度も振り返らなかった。  
気がつくとも私の脇にペンギンの子ど  
もが立って、母親を見送っていた。  
風が吹き始めた。  
すると子どもものうぶ毛が風に吹かれ  
てフワフワと舞い飛びはじめた。そ  
のうぶ毛は大きなぼたん雪のように  
風に乗って、回転しながら母親の後ろ  
を追うように雪に覆われた原野の上を  
舞っていった。



深夜、表に出て空をあおいで見ると、  
薔薇色のオーロラが浮かんでいた。  
だがそのオーロラは青く縁どられて  
いた。



その青い色は母親の瞳の色にそっく  
りだった。  
その夜、母親は帰らなかった。  
三日たっても、帰ってこなかった。  
私は何度も子どもを家に入れたくな  
ったが、母親の言葉を思い返しては、  
犬小屋の中に寝かせておくことにし  
た。